

放射線教育白熱議論

「子どもと若者の教育についての対話」

—第4回福島原発事故による長期影響地域の生活回復のためのICRP ダイアログセミナーから—

宮川 俊晴

2012年11月10、11日、伊達市役所シルクホールにおいて、掲題のセミナーが開催された。これはICRPによるシリーズ物の4回目で、地域の次世代を担う子どもたちの教育をテーマに多くの実践事例発表と白熱した議論が展開された。概要を以下に記す。

第1日目は、郡山市立明健中学 佐々木清教諭から校庭除染を題材とした実践報告や今夏訪問したロシア・ウクライナ視察調査結果が報告された。続いて練馬区立開進第一中学 高島勇二校長（全国中学校理科教育研究会会長）から放射線教育への取り組み、東京医療保健大学 伴信彦氏から、専門家の立場から関わった飯舘村における放射線教育支援活動が報告された。また、ノルウェーとベラルーシからチェルノブイリ原発事故後の教訓が報告された。

午後には、福島県内の小・中学校や高校から校長、教諭、PTA会長、報道機関、市民活動家が参加し、ICRPなどの専門家とパネル討論が実施された。須賀川市立柏城小学校 渡辺尚子教諭からは、2011年秋の運動会では汚染の不安のある中で、外で運動をさせたいとの父兄・教師の思いが、校庭に青シートで土の舞い上がりを抑え、玉入れ競技をさせたと写真で苦労のほどが紹介された。

第2日目は、東北大学 吉田浩子氏が文部科学省の放射線副読本の解説、京都女子大学 水

野義之氏が理系・文系から見た放射線教育のモデルの紹介があった。さらに福島県内の実践報告として、川俣小学校 遠藤真理子校長、山木屋小学校 池田精一郎校長、飯舘村 広瀬要人教育長などから発表があり、対話が進められた。

吉田氏は30年振りに復活された放射線教育の副読本は、客観的な科学的内容を教えるものとして制作され、2011年11月に全校に配布されたことを紹介した。しかし、自らが住民支援に関わっている宮城県丸森町の被災者からの声として、現存するホットスポットへの対応やいざという時に身を守るガイドラインにならないなど、被災地にそぐわない内容のために活用されていない実態も報告された。

会場からは、放射線の利用から始まり、原子力政策のための副読本が焼き直されただけである、防護のための本ではない、福島県の実態が執筆者に理解されておらず福島県の実況が伝わらない、現場に当てはまらないなど、使い難いという被災地の先生の気持ちに共感する意見が多く上がった。

福島県にとって一番必要なことが書かれていないため、使うことに精神的にブロックがかかっている状況が感じられた。これに対して、切実な問題がある福島県版が必要であり、実際に地域で取り組んでいる郡山市の事例が紹介された。吉田氏からは、副読本の内容は正確である

が、福島の内容などの内容が足りず、今後改訂の意向がある文科省に意見を出していく必要性が訴えられた。

遠藤校長からは、川俣小学校における1～6年生までの実践例が紹介された。放射線の授業は学級活動や道徳、総合学習の時間が中心であり、“一人ひとりが自ら考え、判断し、どうするのか決定する”児童の育成を目的としていること、担任の先生が「雨粒君」の紙芝居を自作するなど、子どもが馴染みやすい授業に工夫を凝らしたことが、授業後にはワークシートでその後の行動を子どもにチェックさせ、教師が把握し、褒めてやることで意欲付けし、習慣化することが大切と報告された。

授業前のアンケートでは、放射線について3年生の児童20名全員が「悪いもの」とし、その理由を、「病気になるから」「死ぬから」「ハゲになるから」としていたが、自分で気を付けることを書いてもらおうと、「手洗いが大事なことだと分かりました」など、大人から命じられて行動していた児童が自ら考えるようになったとのことであった。テレビ・新聞の報道から不安を感じている児童に正確な情報を教えることが重要であり、またがんのリスク、個人線量の結果の理解なども必要である。その結果、今では児童は夢中で池の魚捕りに興じていると紹介された。

池田校長からは以下の報告があった。山木屋小学校は2011年4月15日に計画的避難区域に指定され、同日、臨時PTA総会を開き町内の汚染の少ない小学校に移動した。避難している子どもたちと、汚染している地域で暮らす子どもたちのための教育が必要であった。副読本は科学的な知識として使える部分は活用したが、不足する部分は、皆で考えて教材を作った。児童の避難生活は、運動不足と多量の支援物資による栄養過多による肥満の問題も起こした。

池田校長からは更に、「安全な生活を送るために放射線の性質や危険性について正しく理解させる」「家族やふるさとを大切にできる心情を育てる」の2点をねらいとした放射線教育は2012年4月以降に準備が進められ、授業を通じて子どもたちの本当の心の中を理解したことが報告された。すなわち、ふるさとを離れて改めてその素晴らしさを知り、「近所の方が優しくなかった。今すぐ帰りたい」「両親が帰れないと言っているけど、いつかは帰りたい」、あるいは犬猫を置いてきた心の呵責など、児童の心は複雑であった。その中で、除染している大人たちの活動を知り、自分たちで何ができると取り組みを始め、感謝の気持ちの手紙を書き、下級生に伝えることになったことが紹介された。

広瀬教育長からは、飯舘村は丁寧な心こめてを意味する「までい（真手）」の気持ちで1,100名の避難者のお世話をしたが、村自体の避難が必要になり、2011年3月24日に学校を移す判断を下したことが紹介された。村の移送の原則は、①線量が低いところ、②親元から学校に通わせる、③飯舘村の子どもは飯舘で育てる（避難先の学校に入らない）、とし、川俣町の学校で同年4月21日より授業を開始した。教育は放射能・放射線と向き合っていない視点を、放射線教育推進委員会を設置し、以下を目標とした。

1. 正しく理解・身を守る力。
2. 放射線教育を通じた、いじめや差別、風評被害などを防ぐ環境づくり。

2012年の夏休みに2日間にわたって先生たち全員への研修会を実施したが、伴先生の指導によって非常に安心したこと、放射線教育の授業については、①チーム・ティーチングで実施、②専門家のアドバイス、③指導案は校長・教育長の責任、の3点が確認された。3点目は保護者がいるので、担当の先生への配慮であ

主任者 コーナー

った。

同年 11 月、12 月にしっかりモデル授業を実施し、冬休みに再度教員研修の予定とのことである。

また、放射線教育の課題として以下が報告された。

1. 保護者の不安に対する教師の指導力の向上。すなわち保護者に安心感を与える教育。
2. 専門家に対する根強い不信感。大丈夫だと言われながら、全員が村を離れざるを得なかった事情に対して、これから教育を推進するに当たって 1 つのハンディになる。
3. 他の教科に比較すると放射線教育に関する良質の教材が少ない。

これらは、長い間、放射線教育を空白の領域にしてきたつげになっている。

最後に、結婚が破談した家庭も幾つもあること、いわれなきいじめ・差別・風評被害をなくすために国民的な取り組みが必要であること、放射線に対する国民的な学習が進んでいないことが述べられ、早く飯館村で普通の生活をしたのが村民の願いであると報告された。

2 日間のセミナーでは、放射線をネガティブな面から関心を持たざるを得ない被災地が力を合わせて復興を目指し、小・中学校で“安全で健康な生活と家族やふるさとを大切にする心、自ら判断する力”の育成に取り組んでいる現状が数多く報告された。そのために、放射線教育は、理科に限らず、保健体育科や学級活動として、小学 1 年生～中学 3 年生までの全学年で実施できるように教育資料が整備されてきていることが紹介された。これは、汚染があり放射線量率が高い環境で、将来とも生活していくこと、我が家を離れ避難生活をしている生徒とそれを受け入れている地域の生徒がともに健康で



写真 伝統芸能の霊山太鼓を披露する川俣町の少年少女

力を合わせて生きていく力を身に付けることを目的としており、道德教育も包括した教育と位置付けている特徴があった。

また、この理科や保健体育・道德としての教育の上に芸術も大切との主張もあった。地域を慈しむ気持ちを育てる教育を象徴するような、川俣町の伝統芸能の少年少女による霊山太鼓の披露があった(写真)。

全体として、放射線教育は、学校の生徒だけでなく、保護者・地域社会としての取り組み、更には差別・風評被害をなくすため全国的に実施される必要があるとまとめられた。

放射線教育と一口に括ることができない現状が焙り出された今回のセミナーであったが、放射線管理に関わるものとして、機会あるごとに放射線教育に関心を持ち、正確な情報の発信に尽力していくことの重要性を再認識した。

最後に、少年少女による霊山太鼓の披露では ICRP のロシャル氏など外国からの方も加わりリズムカルなばち捌きを楽しむなど、とてもフレンドリーなセミナーであった。

今すぐ帰りたい！ いつかは帰りたい！
でも……。 (川俣町山木屋小学校の放射線教育実践報告より)

(日本原燃(株))